

# 宗学研究における方法論の再考察

山内 舜雄

## 目次

- 一 はじめに
- 二 宗学研究における方法論の意味するもの
- 三 曹洞宗学展開における方法論の再考察
  - (1) 戦前におけるその再吟味
  - (2) 戦后におけるその展望
- 四 おわりに

## 一 はじめに

方法論的吟味は、学問研究の精到を期するためには、きびしく要請されるところのものである。ことに学として特殊な性格を有する宗学においては、かかる吟味がくりかえしなされねばならぬ。思想的に重要な転換期には、なおさら試みる必要性をもつ。

戦後二〇年をへた今日の時点は、その意味で、まさに宗学

研究における方法論を再吟味する、誰でも納得しうる好機といえよう。そこで歴史のながれに沿って出来るだけ巨視的な考察を過去にこころみると同時に、未来へのささやかな洞察をくわだてたのが、以下の論攷である。

## 二 宗学研究における方法論の意味するもの

およそ宗学研究における方法論というばあいには、次にのべる二つの意味をもっていると考えられる。

その一つは、宗学はいかにして学としての成立が可能か、とか或は可能ならばその定義または限界、ないし隣接学との関係は如何。というようなことを方法論的に追究するばあい用いられるところのものである。いうなれば従来、宗教学の領域でとり扱われた、宗学成立への方法論的手続きといったものを指している。原理的な、あるいは基礎的な意味におけ

る宗学研究の方法論的問題といつてもよい。

それは宗学を学問的に成立せしめる、必須の条件であるから欠くべからざる学問作業である。けれど、宗学成立の方法論のみを単に論ずるといふことは、多分に宗教学的の方面からのアプローチといふことができる。すなわち宗学を、近代的な学として基礎づけようとする学問技術的な意図が、そこにみられる。

したがって宗学研究における方法論の問題は、ウェイトを少しかえると、宗教学それ自身の領域において成立する、きわめて興味ある問題となるはずである。どちらかというところまで、この分野からの問題提起が、宗学研究における方法論の主要テーマを形成しているかのごとく思われる。がそれは、あくまで宗教学の領域における追究であるから、重要ではあるがここではしばらく指いて、宗学そのものにおけるより実際的な面からの方法論について論じてみたい。

ただ一言ふれておきたいのは、わがくにでは極めて実証的な宗教学が発達していて、そのなかで宗学は、あたかもその存在を保証されているかの如き観があることである。上記のごとく宗学は、宗教学によってとらえん科学的に基礎づけられねばならぬとされ、いわば宗教学によってその頸の根を押えられているようにも、みられる。

しかし、宗教学を専攻したのち浄土宗学へと移行した諸戸

素純氏は、宗教学のなかに抱えこまれたような宗学のあり方に疑問を投げ、つぎのようにのべている。

「一般に、現代の宗教学研究において、実証的研究が、極めて重要であり、その業績が高く評価されている点を十分に認めるとして、それでもなお、宗教の性質を明らかにしようとする時、果してそれだけでよいか。宗教とは何かという問題を考へて行く上に、いわゆる実証的な宗教学的方法だけで、十分なのか。……」

この点、キリスト教神学者のきびしい指摘をまつまでもなく、近代の実証的宗教研究者にとつては、大いに考へてみねばならぬ重要問題である。問題は宗教研究一般における、基礎的方法論にある。今その疑点を卒直にのべるならば、宗教学には、神学的方法論をもって、裏打ちされる必要があるのではないかということに尽きる。いわゆる宗教学とは相容れない、全く違った方法論をとる神学こそ、かえって、実証的宗教学的方法を補うものとして、重要なのではないかという疑問が、私には、どうしても残るのである。」

「複雑な宗教現象の研究には、科学的研究方法とともに、性質は全く違っているが、神学的方法による宗教理解の途も亦必要であつて、二つが互に相補うものとして、二本足であることが、必要ではないか。」（「法然上人の現代的理解」5～7頁）

すなわちヨーロッパでは、壮大なキリスト教の神学体系のなかに、逆に宗教史や宗教学などの実証的研究がふくまれている。神学の片隅に宗教学や宗教史は、その地位をあたえら

れているにすぎないという。

わがくにの場合は、ちようどこれと反対の関係が、神学と宗教学との間に成立している。そこには、いわゆる神なき宗教学を輸入して、科学性一般をのみ極めて強調する、わが国における宗教学の歴史的発達過程を考慮しなければならぬが、ともあれ両者の力関係には興味あるものを感じる。科学性のみを強調して宗教性にとぼしい学問態度が許される信仰風土においては、むしろわがくにの如き宗教学のあり方が、とうぜんのこととして認容されるであろう。

ところが、これを受け容れる歴史的、社会的基盤のないところでは、かならずしも科学的真理性のみを振りかざして宗教学研究をいとなむわけにはゆかない。大げさにいえば、神をささえる宗教と、学問をささえる科学との、はげしい闘争が、その底にひめられているわけであるが、現代社会における両者のバランスの不安定さが、そのまま神学と宗教学との間の力関係として尖鋭化していると見られぬこともない。こうなると単なる理論上の問題でなく、いづれを受け容れうるかという背後の社会構造の問題となってくるが、現代文明における根元的な問題の一つがここにあることだけは指摘しておかなければならないであろう。

結局、神学と宗教学との問題は、それはそのまま、ほぼ同じ次元で宗学と宗教学との問題へと移行しうろと思われるの

であるが、おおきく見れば現代文明における科学と宗教との力関係の反映となってくるのではあるまいか。といって科学と宗教とのあいだに決着をあたえるということは早急にはできないから、宗学は不安定ともいえる宿命的性格を、こんごも逃れさせることはできない。逆にいえば宗学にこそ、知と信を共有する人間の矛盾的性格が、もっともあらわに集約されているということができる。学問と信仰との交叉する宗学に、人間存在を具体的に解く鍵があるというべく、またそれだけの課題を担って宗学は、過去の歴史のうえに苦難な足跡をのこしてきたともいえる。

そこで、宗学成立に関する原理的な方法論的問題は以上にとどめて、かくして実在した宗学そのものについて、すなわち過去半世紀にわたって発達形成された曹洞宗学について考察をすすめると同時に、そこでは方法論の問題が、どのように提起されるかを考えてみたい。

第二の問題とりあげるにあたって、まず第一の問題における宗学の定義といふことが必要となってくるわけだが、原理的なその討究をばいいた以上、歴史的にその輪廓を描く以外に、ここでは方法はない。それは大雑把にいつて、宗乗の、近代的な学問理解のうえに成立したもの——ということができるのではあるまいか。

宗学そのものの本質をなす宗乗には、もちろん Wissen-

schaff としての学の意味はない。もっとも宗学を、たんに宗乗学あるいは宗旨学として、東洋古来の伝統的な学の意味にのみとどめるなら別であるが、このような学の意味規定は、もはや現今では通用しない。学というからには、そこに近代的な学問としての性格を、なんらかの意味で有しなければならぬ。

従来宗学といわれるものは、この点はまだ不明瞭であつて、宗乗をふくめての東洋的な学の意と（それは実践をも包含する）、なにほどか近代学問化された学の意とを、明確に區別することなく、両者を巧みに使いわけしている観がある。すなわち近代科学としての学問的脆弱性を衝かれると、信仰の学としての宗義宗乗学へと逃げ、逆にその閉鎖的な独断性を指摘されると、こんどは客観性をもつ近代的学問としての宗学へと乗り替える。

故意に宗学の意味規定を曖昧にしておいて、あたかも伝統的な宗学はその性格をかえることなく、近代的な学問によって裏づけられて成立している、かの如き印象をあたえる。が、このような曖昧な態度は、結局宗学研究者の研究姿勢というものまで曖昧にしてしまうのではあるまいか。やはり実践までをふくむ東洋的な学の意をもつ宗乗学宗旨学と、すくなくとも近代的な学問研究の方法が加味される宗学とを、明瞭に區別する必要がある。第一の設問における宗教学からの宗学

規定の意味も、またその苦心も、ここにあるわけである。そして後者においてのみ近代的な意味の宗学が成立すると思われるのであるが、私が以下使用する宗学の意味は、すべてこれ以外のなはものでもない。

したがって宗学は、その学的成立を基礎づけることに加えて、さらにその研究をすすめるためにも、かならず近代的な諸学の助けを借りねばならない。いまは實際研究をすすめる場における方法論のみを論じようとするのであるが、それが哲学であれ、倫理学、心理学、歴史学、社会学などの諸学であるかは別として、ともかくも近代的な学問を駆使してこそ、はじめて宗学研究はその近代性を獲得する。

そこには各種の学問方法論——哲学的、心理学的、歴史学的、社会学的——が使用されて、宗学の前進が約束される。ふつう宗学研究の方法論というばあいには、実際これらの、宗学展開へと適用された諸科学の方法をさしていると思われる。

この方をとりあげたほうが宗学そのものの成立する可能性を単に方法論的に追究することより、はるかに現実的である。私が第一の設問を措いて、第二のこの立場からのみ宗学研究の方法論をとりあげる理由は、ここに存する。

## 三 曹洞宗学展開における方法論の再考察

## (1) 戦前におけるその再吟味

それは従来、曹洞宗において宗学として取扱われてきたものを、具体的に考察し、その背景をなす時代的な思潮と、そこに適用された研究方法論を再吟味することを意味する。そして、ある程度の批判的討究をこれらに加えることによって、過去に存在した宗学の性格を想定すると同時に、将来に適用すべき研究方法は、いづれの分野の学問におけるものであるかを、洞察してみようと思うのである。

というと、まず宗学研究の史的展望ということから始めねばならないが、歴史的な宗学展開のプロセスをのべるのは、いまの目的ではないから、方法論的に意義のある部分だけをとりあげて、その要点のみを簡単に推察してみたい。

まず洞門としては、いちはやく近代の学問を身につけた人びと、忽滑谷快天、岡田宣法、衛藤即応などの諸先生によって、上述の意味の宗学の輪廓と内容がつけられたのは、周知のとおりである。本来、普遍的であるべき宗学に固有名詞をつけて呼ぶのは、問題がないではないが、忽滑谷宗学、岡田宗学、あるいは衛藤宗学と呼ばれたものが存在したことは歴

史的な事実である。

いま、それらの歴史的経移を詳述する余裕はないから、直にそこに用いられている研究方法論はなんであり、いづれの学問を背景としていたかを吟味してみよう。

一言にしていえば、そこでは、現在の人文科学に属する諸学が援用されて、宗学の近代的理解と研究がすすめられている。したがって研究方法論も、おおむねこの範囲に限られる、といってよいのではないかと思う。

そして如上の固有名詞を冠されるような宗学の成立した時期——大正から昭和の初期にかけて——は、いわゆる大正教養主義の名があるごとく、社会科学の方はいざしらず、人文科学の分野では、それほど宗教に対して危機意識はなかったと考えられる。大きくみれば、そこでは人間の文化が、まだ分裂と破綻をきたさない——その兆候は充分萌しはじめたとしても——時期であったと思われる。

したがって人文科学の主流をなしたであろうところの哲学をはじめとして、倫理学、心理学、あるいは歴史学にしても、宗教に対しては今からみるとまことに穏健な態度を持し、人類文化最大の遺産たる宗教を、根底から批判し否定しざる傾向は見られない。というより、宗教の存在理由を、きわめて好意的に立証してくれる手助けさえしていたごとくである。もちろん、大正後期から昭和初期にかけての、マルキシズム

の盛行はみおとすことはできぬが、種々な事情で正統な学問研究のルートにはのらなかつたから、直接それが宗学研究に影響をあたえとは考えられない。

具体的な例をあげれば、当時流行した新カント派の哲学——戦前の日本思想界は、ドイツ観念論系統の哲学が、つねに支配的であった——にしても、また禅の体験と思索とを背後にもって極めて独創的な思想体系を組織した西田哲学にしても、文化における宗教の地位を確保してくれたうえに、とくに後者などはその発生基盤からして、曹洞宗学に対しては有利な思想背景を提供していたといつてよいであろう。

この、今からみれば恵まれた時代に、わが曹洞宗学がその近代学問化をなしたことは、幸福なことであつたと思う。また、このような安定性をもつ時代であつたからこそ、宗学としての一つの成型が可能であつたと思われる。ことに、すぐれ哲学者であると共に倫理学者であつた和辻哲郎博士によつて、道元禅師の現代思想からの発掘がおこなわれたことや、西田哲学の後継者たる田辺元博士によつて眼蔵研究がなされたことなどは、宗学研究者たちに対して、たしかに新しい視野からの方法論を提供したものであつたと推察される。宗学の現代的研究というと、それは思想的には哲学的研究を意味したわけであるが、それも宗学者の方から、これら流の哲学に近づく必要はなかつた。むしろから近づいてくれ

たのである。

であるから、宗学の現代的研究といふことは、しごく安定した思想的ムードのなかで行われたように思われる。如上の和辻、田辺あるいは秋山範二等の諸博士の道元研究が、宗学そのものにどのような影響をあたえたか。その実証的研究はまだ現われないが、宗学者からの反駁をもふくめて、整理し収束する必要があるのではあるまいか。すでに四分の一世紀をへているのであるから、対象化して評価する段階にはいつていると思う。

現在ですら、近代的な意味における道元研究の古典として、これら諸博士の著書が推されるところを見ると、その宗学界に及した影響の大きさは想像にかたくない。そして、このよるな日本思想界のリーダーたちによつて道元禅師研究がささえられていたことは、宗学の発展にきわめて好都合であるばかりでなく、学問方法論上の問題は心配する必要すらなかつた、と考えられる。

なぜならば、方法論上の問題は、専門の哲学者たちによつて充分保証されていたから、安心して宗学の哲学的説明——すなわち現代的研究が、試みられたわけである。当時この傾向の研究論文が、宗内外に数多く現われたのは、あえて指摘する要はあるまい。それらは題目からして、一見それと解るほど顕著な影響をうけている。

一般思想界の状況は以上の如くであるが、一方宗内においても、宗学そのものの学的確立をめざす試みがなされていたことを見落してはならない。そこで行論上、最初の設問にすこしく触れるわけであるが、宗教学からの学的基础づけが、やはりこの時期に、宗学そのものに対して行われていたのである。

「仏教の宗教学的的研究に就て」（日本仏教学協会年報第二年所収）という衛藤即応博士の、昭和初期の論文がその始めであり、ついで「史実と宗義」などの論攷をへて「宗祖としての道元禪師」において、それは収束されるのであるが、そこで用いられた宗教学は、どのような系譜のものであったのか。ドイツ観念論系統の、オットーやハイラーという、今からみればかなり思辨的な宗教学であったことは、晩年その講座に列した筆者の親しく知るところである。いまそこで用いられた方法論の過程を詳述するいとまはないが、簡単にその結論のみをいえば、宗教は広く文化の中で、きわめて安定した地位をあたえられると同時に、それから演繹される宗学もまた、説くところの宗教学の中で住みよい場所を提供されていた、ということが出来る。

かくして当時の宗学は、一般思想界をリードする哲学の分野においても優遇される地位にあつたし、宗学そのものの学的基础づけも、上記の斬新な宗教学などによって強力におこ

なわれていたのである。まことに恵まれた境位にあつたというべきである。

もっとも伝統の宗乗だけでよいものを、なまじ近代的学問で武装しようとしたところに学の概念の混淆を来し、不安定な宗学を成立せしめたものとして、宗学建立に参加した人びとは功罪あい半ばする、という見方もある。ことに戦後の、実証的科学のみ学問とするかの如き立場からは、かかる批判はとうぜん出るべきものと思われる。

けれど当時の学が *Wissenschaft* としての意味をもち、純粹対象化された事物への客観的追求であるにしても、まだ思辨的な性格を、宗教学の領域では多分に有していたから、宗学の学としての成立はように認容されたのである。それゆえにこそ、宗学の形成が歴史的課題として要請され、その遂行がつくよく志向されたのである。したがって現今の立場からのみ宗学の功罪を論ずることは、かかる歴史的経緯を無視した、安易なる過去の裁断ということが出来るであろう。

それにしても、宗教と科学との対決をいちおう済ませて、文化の中における宗教のあり方を考究し、さらに仏教の宗教学的的研究を提唱して宗学の客観的研究におよび、歴史科学などとの相剋をへてついに、「宗祖としての道元禪師」において収束された衛藤宗学のあゆみは、まさに近代宗学研究の一範型といふことができる。「宗祖としての道元禪師」を目し

て、宗学の科学的研究を提唱したにかかわらず最後は信仰の学に退却したとみるのは皮相な見解であって、その全体的なプロセスを觀望すれば、近代的學問研究を経過して信仰に帰着するという宗学必然のコースをそこにきめ細かく見出しうるのである。

このように戦前の宗学研究は、確立された基盤と、安定した思想背景をもっていた。このことが、あのかがかしい成果を、宗学界の各方面に生んだ要因と考えられるが、さらに研究者として大切なことは、學問研究しておれば自然に宗学を把握しうるという、おおいなる安心感の存したことである。

宗学研究に援用すべき近代的な學問が、宗学にとって安心可能のものであり、それらにおける研究方法論を自由に宗学研究へと駆使しうるということは、研究發展上不可欠の要件といえる。使う學問自体に、宗教否定的要素がふくまれていゝるならば、それこそ研究成果どころではないはずである。

私が当時をかいま見て無限になつかしむ理由も、ここにある。この恵まれた世界で、どのような業績がなしとげられたかは、後学のわれわれとしては、ひたすら嘆稱するのみである。具体的にふれることは、ここでは差し控えたい。

## (2) 戦後におけるその展望

戦後における宗学をとりまく學問的世界は、どのように変

化したであろうか。いわば、ここからが主要な論点をかたちづくる。

それは戦前の人文科学中心から、社会科学へと學問の主流が移動した戦後の思想状況からみて、宗学は、有力なその思想背景を喪つたと約言できるのではあるまいか。

ことに戦前あれほど思想界の中心的存在であつた哲学は、昔日の座を追われて、思想流行の梶をとらないばかりでなく、実証的な研究方法論を欠くところより、社会科学の方面から手痛い攻撃にさらされている。学の学としての哲学は、消滅するかの如き觀さえあつたのである。

こうして宗学をとりまく、というより宗学の有力なささえ手であつた哲学が、思想界の表面から後退したことは、宗学研究におおきな影響をあたえずにはおかない。それは宗学研究への有力な方法論をうしなつたことを意味するからである。

いまさら、西田哲學的思想方法やドイツ觀念論的思考をつかうわけにはゆかない。とすると、これらを喪つたとき現代思想への切り込みが、宗学としていかにして可能であるのか。宗学はいわば、おのれをとりまく學問的世界をうしなうと同時に、現代に語りかける通路をも見失つたかにみえる。わずかに、戦後流行した実存主義的哲学が宗学の現代的解釈につかわれたことを指摘しうるにすぎない。が、これとても一時しのぎの觀がなくもない。非体系的なこの哲學の性格からし



て、所詮断片的な引用や比較がおこなわれたにすぎず、ながつづきしなかった。

そのうえ宗学は、後続の研究者の面からみて、はなはだ都合わるい状態に立たされている。それは戦後の教育体系が、実証的な社会科学を、学問の正統とするかの如き思想のもとに組み立てられていることである。したがって戦後の新教育のルートにのって思想形成をおこなった人たちは、おおむね思辨的な観念的な思考は容易にうけつけない傾向にある。実証的なデータのあるものでないと承知しない。勿論、そこから皮相な実証主義が横行し、体系的思索にかける欠陥が出てきているが、かかる傾向を否定しすることは不可能であろう。すると戦前の、あの深い宗学の思想的遺産は、どのようにして理解され後継されうるのであろうか。それらを理解する思想的基盤というか基礎教養が、まったく異質的なものとなってしまった。新旧世代の思想的断層は、宗学においても重大な違和感を生ぜずにはおかない。が、この問題は重要であるが指摘するにとどめて、行論を先にすすめたい。

以上のごとく宗学をとりまく学問の世界が没落したのに引替えて、戦後発達した社会科学系の学問で、宗学研究にその方法論の使用できるものがあるのであろうか。旧きは喪つても、これに替る新しいものがあれば、問題は無い。

すると、戦前宗学を基礎づける役目を果たした宗教学が、ま

ずわれわれの視野に入る。この分野の発達は、戦後とくにめざましいだけに、注目すべきものを持っているが、ロバート・N・ベラーなどの研究（「徳川期の宗教」）がもてはやされるころをみると、宗教学というより宗教社会学が盛行しているかにみえる。しかし日本の宗教分析へと適用された彼の宗教社会学からの方法論が、はたして特殊な宗学研究まで援用しうるのか。この点については、すでに触れたことがあるので（「宗学研究」第五巻拙論「伝統解釈の連続性に関する一試論」参照）ここでは省略するが、問題の存するところであろう。

また、このような社会科学を背景とした宗教研究は、なるほど宗教を社会存在における機能として役割として認容しているかにみえるが、本質的に宗教肯定の上にたつての立論なのか、疑問なきを得ない。社会構造が変化し、その機能が消滅すれば、宗教は亡びさるのか。たしかに宗教の存在を機能や役割りから価値づけるやり方は、斬新な理論であるが、それだけで安心してよいものかどうか。一時の気やすめに過ぎないのではないか。それに社会科学に対しては、宗教は、その発生当初からぬぐいきれぬ不信の念をもっている。いつかは結局否定されるのではないかという。

したがって宗学研究に従事するものは、社会科学には、容易に近づかない。というより両者の「ミゾ」が、人文科学に比してあまりに深いのである。よく宗学者は伝統の殻にとじ

こもるとか、旧弊を墨守するとかいうが、これら各宗宗学者に投げあたえられることばの裏には、軽々しく新奇な学問にちかづき得ない充分な理由と、そして宗学者としての慎重さがあることに気付かねばならない。

と同時に、宗学の立場をふまえての、これら社会科学への本格的な研究が、やはり必要ではないかと思う。それなくしては現代的理解が成り立たないというなら、試みる以外に方法はない。それにしても宗門の諸先達たちが曾って、その時代の先端的な学問を、じつに勇敢にそして徹底的に摂取されたことを思うと、いつまでも対決を回避しているわけにはゆかぬであろう。歴史的課題の遂行は、いつの時代でも、きびしく要請されるものである。宗学研究の新しい目標の一つが、ここあることを指摘すると共に、すみやかなその成果を期待するのは、私ひとりではないであろう。また若い宗学研究者たちが、宗学研究の方法論について、深刻な苦悩におそわれるのも、この辺の事情にあることを理解する。

戦後の実証主義的傾向が、宗学に思想的な打撃をあたえたことは否定できないが、反面よい影響もあったことを、見落してはならない。それは鏡島元隆博士も指摘されているとおり（「道元禅師研究の回顧と展望」『文学』一九六一年六月号）歴史学や文献学からの実証的な研究が、宗学においても大きな成果をあげたことである。戦前このような研究がなかったわけ

ではないが、戦後はその背後の思想傾向にささえられて、腰のすわった感さえある。それだけに成果もいちじるしい。個々の研究は周知のごとくであるから触れないが、問題は、かかる歴史的、文献的研究成果をふまえて宗学は、今後どのような思想の現代的再構成をこころみるのであろうか。歴史資料の整理や文献的探索が、いかに精緻をきわめようとも、思想生産がなければ、宗学の生命はない。この点、戦後思潮への宗学からの思想的アピールがほとんどないところをみると、宗学はたしかに現代思想への通路をうしなない、それを可能にする方法論を回復していないともいえる。

そこで私のささやかな体験にふれてみると、駒沢大学の宗教社会研究所が、水野弘元博士指導のもとに、ここ十年以上にわたって歴史学や民俗学や社会学関係の研究者をあつめて、宗教研究への総合的な研究成果を世にとりていくことは周知のとおりである。私も啓発されるどころが多く、大きな示唆をうけているのであるが、それらが仏教研究となかなか結びつかないもどかしさのあることを、共同研究者のひとりとして否定することができない。おそらくそれは、忍耐つよい研究の積みかさねのすえ、次第に隣接する学問の境界の溝を埋めてゆくことによって解決されると思われるのであるが、はたして専門領域を経験的にちかずけるだけで総合的な成果が出てくるのか。楽天的にそう考えてよいものかどうか

か。共通の基盤にたつ統一理論のワク組みをつくるのが、先ではないのか。そうでないと各分野の研究が各自に発達するだけではないか。という反省が、つよく起るのである。

このことから類推すると、宗学は、戦後発達した実証的成果をふまえて、現代の思想や文化に対して、根源的な問いかけを一貫してこころみる必要があるのではないか。そして、それを可能にする方法論の撰択決定こそ、問題はまたもとに戻ることになるが、現下の急務ということになると思う。

#### 四 おわりに

以上、宗学というものを、思想的ないし抽象的にとり扱いきた感があるので、以下方向をかえて、宗学のもつ現実的性格にふれてみたい。宗学は、もちろん思想的存在として独立しうる内容と歴史をもつものであるが、やはり背後に宗学をささえる宗団を予想してこそ、生命ある存在となる。この意味で、宗団を離れた宗学の存在は、現実的には考えられない。

そこで、宗学と宗団との関係を見ることが、めんどうな教団論上の問題も生じてくるが、紙幅もつきるので結論だけを先にいえば、この各宗共通の悩みである宗学と宗団との現実の乖離は、宗学から宗団を規制することよりも、宗団の現実から宗学を見てゆくことによって、ある種の打開策

がとられうるのではないかと思う。

宗学のような性格の学問が、現実との相互限定の途を断たれると、断たれた地点で思想的にすぐ飽和状態に達する。そして、定められたワクの中を悪循環する現象が現われる。

このばあい、宗学の理念で現実の宗団を引張ることは不可能であるから、宗団の方から現実的实践をとおして宗学につらなる以外に方法はない。すなわち宗団の現実的な存在形態から実践可能な行動様式を確立し、確立された行動様式をもつて宗学にはたらきかけ、そこに両者の緊張関係を回復することが急務である。このことは、かならずしも現実の宗団から宗学を限定することを意味しない。むしろ宗学をして、現実との相互限定の途を見出さしめ、生々たる発展を期せしめるものではないかと思う。

これがため宗学は、方法論上の問題をぬきにしてその研究对象を、できるだけ手まえに呼びこむのも一方法ではないかと考えられる。具体的にえば、近世ないし近代にのみ、その研究对象を思想的にも歴史的にも絞り、現実の宗団と直接関係ある研究態勢をつくりあげることである。そこから、宗団における実践可能な行動様式との関係も、おのづと生れてくるものと思われる。かくして両者の緊張関係が現実に戻るとき、宗学は、はじめて現代の思想や文化への問いかけを、根源的になしうる資格の一つを獲得するのではあるまいか。